



【小学1年生・2年生】

特選

お母さんの手

城東小学校2年

片瀬 実優

お母さんの手はふしぎだな
 いつもごはんがおいしいし
 せんたくものもいいにおい
 どうしてなの
 ないしよだよ

お母さんの手はふしぎだな
 いたいところがすぐなおる
 さむい時にはあったかい
 どうしてなの
 ないしよだよ

お母さんの手はふしぎだな
 やさしい時にはきもちいいし
 おこっている時はつめたいし
 どうしてなの
 えーっと
 ないしよだよ

お母さんの手はふしぎがいっぱい
 おねがい
 またいつか
 おしえてね
 おかあさん

(評) なんでもしてくれるお母さん。お母さんのいっ
 しょうけんめいなようすが、そしてその姿が、あた
 たい詩にあらわれています。よんでいるだけで、
 やさしい気もちになつてきます。

(彦根文芸協会 西村 和野)

準特選

おとうと

平田小学校2年

橋本 知佳

おとうと
 ーさい
 ごはんを パクパク
 おいしそう
 しばらくすると
 ポロ ポロ ポロ
 ポロ ポロ ポロ
 ゆかには
 ごはんの 花ばたけ

(評) きょうだいのあたたかいまなざしが伝わってきま
 す。おとうこのようすを、よくかんさつして、すて
 きな詩になりましたね。「ごはんの花ばたけ」とい
 うあらわし方が、とてもいいですね。

(彦根文芸協会 西村 和野)

準特選

がっこうのおと

若葉小学校1年

片岡 惺楽

じゃあじゃあじゃあじゃあ
 すいどうなるよ
 ゴシゴシゴシゴシ
 けしごむけすよ
 ゴクゴクゴクゴク
 おちやをのむよ
 ざわざわざわざわ
 みんながしゃべるよ
 シーシーシー
 じゅぎょうちゅう

(評) がっこうというたくさんの人の中で、耳をすま
 しています。きょうしつの活気がつたわってきてじゅ
 ぎょうちゅうだと気づきます。思わずきょうきよ
 とまわりを見てしまいです。

(彦根文芸協会 西村 和野)

佳作

ニジイロクワガタ

城東小学校2年

荒木 祥一

きらきら きらきら かがやいて
 きらきら きらきら まぶしくて
 きみどり きいろ
 オレンジ ピンク
 ちやいろに みどり
 きらきら きらきら 色が変わる
 ぼくの家にはきませんか

佳作

いちご

稲枝東小学校1年

有田 芽唯

あまくて すっぱい いちごちゃん
 かわいい まっかな いちごちゃん
 ふくら ふくら いちごちゃん
 ぷらぷら ぷらぷら いちごちゃん
 みどりのぼうしもかわいいよ
 あかい あかいまっかないちご
 ぱくりとたべるとほっぺがおちちゃう
 パクパクいっぱいたべたいな

佳作

こくばんになにかこう

若葉小学校1年

服部

煌

こくばんこくばん
 なにかこう
 ねこかこう
 かーけた
 こくばんこくばん
 なにかこう
 ぼんだかこう
 かーけた
 こくばんこくばん
 なにかこう
 とらかこう
 かーけた
 こくばんこくばん
 なにかこう
 へびかこう
 かーけた
 こくばんこくばん
 なにかこう
 あっ
 こくばんいっばいだ

入選

お月さま

平田小学校2年

馬場

優海

秋のよは
 きれいな夜空
 気もちよい
 まんまるお月さま
 みんなをみてる
 今夜は
 月に のぼった
 ゆめ みるよ

入選

秋のはじまり

河瀬小学校2年

嶋崎

龍希

夏のおわり
 秋のはじまり
 田んぼのいねかり
 イナゴを見つけた
 公園のいけに
 ヤゴがいたよ
 夕方に
 アキアカネがとぶ
 秋のはじまり

入選

がっこうのおと

若葉小学校1年

山口 心歌

じゃーじゃーじゃーじゃー
すいどうなるよ

ドンドンドン
あしあとなるよ

ぐうぐうぐう
おなががるよ

ぐうちよきばー
じゃんけんするよ

きゅつきゅつきゅつ
こくばんかくよ
ペラペラペラ

かみがなる
はちっぱち

ふでばこあくよ
キンコンカンコン
チャイムがるよ

【小学3年生・4年生】

特選

秋を感じる

城東小学校3年

谷口 実侑奈

秋をかんじる秋だなあ

きつね色のおちばがゆつくりゆれている
私のまわりでゆれている

少しつめたい秋だなあ

長そでの子がふえたなあ
そろそろ長そでにしようかな

ほくほくおいしい秋だなあ

おばあちゃん家 家族みんなでおいしいな
私は ほっぺがおちそうだ

秋を感じる秋だなあ

きつね色のおちばがゆれている
私のまわりでおどってる

ふふふ 楽しそう 私もまぜて

(評) 「秋」という言葉を何度かつかっていますが、その一つ一つに違うひびき・違う思いが込められていることに感心しました。また、「ゆつくりゆれている」「わたしのまわりでおどっている」など自分の目や自分とのつながりで、生き生きととらえていて、秋を体じゅうで感じている作者のくらしが浮かんで来ます。

(彦根文芸協会 谷口 明美)



準特選

冬の小さなひみつきち

平田小学校3年

南部 花寧

こたつって ひみつきちかな
かくれがかな
中にもぐってみればまつくら
けれど だれにも見つからない
だから やっぱり
かくれがだ

名前はみんな しってる
でも ひみつきちだつてことは
だれもしらない
だから やっぱり
ひみつきち
どっちかな

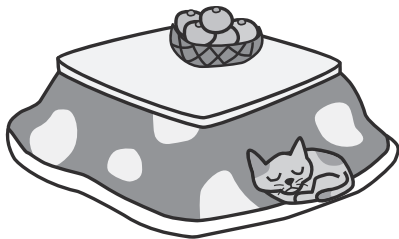
じゃあ 春のひみつきち
かくれがは なんだろう
夏と秋はどうだろう

わたしがひみつきちやくれがを
もっているといったら
きみはどんなのを
そうぞうする？

(評)

三年生の頃の元気いっぱいの子は、たんけんが好きで、自分や自分たちだけの「ひみつきち」を持ちたいと思います。こたつの中のひみつきちにわくわくしている作者の気持ちが伝わってきます。けれども、きけんなことはしないでくださいね。

(彦根文芸協会 谷口 明美)



準特選

空を見上げて

城東小学校3年

鈴木 陽成

空を見上げておねがいだ
今日はお天気おねがいね
晴れてえん足行けるかな

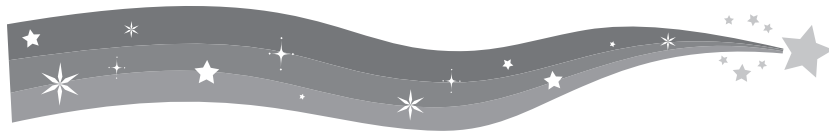
空を見上げてたのむんだ
あしたは雨をふらせてね
あしたは体育あるんだよ
てつぼうにが手だできないよ
あしたは雨をふらせてね

空を見上げて楽しそう
あしたは雪をふらせてね
雪だるまを作るんだ
あしたは雪をふらせてね

空を見上げてさけぶんだ
いつもありがとうお空さん
あしたもお天気おねがいね

(評) 元気なみなさんの毎日のくらし方は、お天気の変
化で大きく変わってきますね。自分の願いをかなえ
たいと「空」にお願いする作者のひたむきな気持ち
が強く伝わってきて、生き生きと励んでいる姿を応
援したくなります。

(彦根文芸協会 谷口 明美)



佳作

雨の音がきもちいい

若葉小学校3年

石田 莉音

少しぬれるのはいやだけど
しずかに雨の音を聞くと
楽しいよ いい音だよ
何度聞いてもおもしろい
たまにちがう音があるけれど
それも新しいはっけんだ
同じ音 ちがう音
たくさんあつておもしろい
雨がふると家からでられない
だけど音を楽しむといいね
パチャパチャ
音がするかもね
葉っぱからしずくがおちてくるかも
水たまりをふんでもいい音するよ
雨はたくさんじっけんできるね
ふむ音 はじく音
それぞれちがう音

佳作

あこがれ

城西小学校4年

松本 咲希

さわってみたいな
白いふわふわ
大空で太陽とならんでる
せのびをしてもなかなかとどかない
どんなかんじかな
ふにゃふにゃかな
食べてみたいな
白いふわふわ
大空で太陽と街をみている
手をのばしてもとどかない
どんなかんじかな
甘いかな
のってみたいな
白いふわふわ
大空で太陽とニコニコしてる
はしごを使ってもやっぱりとどかない
鳥さんはのれるのかな
私はのりたい
幼いころからの夢

佳作

しらない問題

平田小学校3年

北村 潤奈

今日の夜は妹のべんきようおしえ
 自分でいろんな事をしたいの
 妹は「姉ちゃんおしえて」っていう
 私は「自分でしなさい」と言う
 そしたら妹は「いやだいやだ」とわがままだ
 でも私はときどき「OK」と言う
 妹は算数や国語でわからないところがおおい
 私は一からおしえる
 妹は「わからない べんきようきらい」っていう
 けど私はこういうところが好きだ
 こんどのわからないもんだいはどこだろう

入選

起きる時間

城東小学校3年

池田 智奈美

学校がある日は
 早く起きられないのに
 休みの日に
 目がさめるのはなぜだろう
 休みの日は
 お父さんと遊べるのが
 楽しみだからかな
 学校の日も
 友だちに会えるのにな
 お母さんは
 学校がある日は早く起きるのに
 休みの日は早くおきないのはなぜだろう
 休みの日は
 お父さんがいてくれるからかな

入選

雨

若葉小学校3年

福原 虹桃

雨 目をとじると
 ザーザー ピトン
 ポトポト
 目をあけると
 音といつしよに見えてくる
 しづくの形
 ゆれる葉
 耳をとじると
 葉からおちる水
 たてもものからながれおちる水
 はだでかんじる
 さむい風
 地からあふれる水

入選

楽しい友だち

平田小学校3年

西村 いろは

学校ではいつも友だちと遊んでる
とくにジャングルジムおにごっこをしてる
でもさい近あきてきた
だって五日れんぞくでしてるもん
「ジャングルジムおにごっこしよう」
ほらね いつも友だちがさそいに来る
でもねわたしは・・・

「いーよ！ さきに行つといて」と言う
だってせつかくさそいに来てくれるもん
しかたないやん
あーあ これで六日連続や
早く行かないと友だちがまつてる
「おまたせ まった？」
「ううん おにはこの子ね！」

ジャングルジムおにごっこがはじまった
さいしょはいやだなあと思つたけど
友だちと遊ぶと楽しいな なんてやる？
でもたまにはちがう遊びで楽しみたいなあ
ジャングルジムおにごっこよりも楽しめるから

入選

ハロウィン

城東小学校3年

山下 藍士

十月三十一日はハロウィン
町ではおばけやかぼちゃが目につる
ハロウィンだな
たのしいな
ぼくはハロウィンが一年で一番すきだ
それはないしよだけどね
じつはぼくは十月生まれ
たんじょう日もあるし
ハロウィンもあるから
二回楽しめるからだ
たんじょう日は一日だけど
ハロウィンは大すきだから
時間が長く感じるからだ
ケーキがすきだから
二回もいい日があるから
ほんとうにすきなんだ

【小学5年生・6年生】

特選

私はねこ

金城小学校6年

木村 ひより

私はねこ
いろんないえのへいのぼり
今日はなにしようか
かんがえる
でもなにもきまらない
あーひまだな・・・

私はねこ
いろんないえのへいのぼり
今日はなにしようか
かんがえる
そうだ
あのことおしゃべりしよう
そうだ
あのことごはんをたべよう
そうだ
あのことひなたぼっこしよう
あーわくわくするな
あーわくわくするな

(評) ねこになりきった作者の心のあり様が、リアルで面白いです。ひまなねこが「あのこ」と「おしゃべり」「ごはん」「ひなたぼっこ」と詩としてのリズム感も上手に使っています。これからの詩作にも「わくわく」させられます。

(彦根文芸協会 やまかみ まさよ)



準特選

いろいろな空

金城小学校6年

小原 百笑

空を飛ぶ

パサパサ音をたてながら

毎日がう色の空

ある時は青

ある時は黒

ある時は真つ赤

上から見える

皆の顔

これは空を飛べる

ぼくだけの特権

空を飛ぶ

パサパサ音をたてながら

毎日がう形の雲

ある時はふわふわ

ある時は雲が無かったりするんだよ

その雲の中を通れるのは

空を飛べる

ぼくだけの特権

(評) 大きな鳥になりきって、大空を羽ばたいている様子が上手に表現されています。変化する空の色や形、「皆の顔」が、心に残るスケールの大きさを感じさせる作品となっています。

これからも、詩作を楽しんでほしいと願います。

(彦根文芸協会 やまかみ まさよ)



準特選

あいさつは調味料かもしれない

平田小学校5年

井上 日和

あいさつは
調味料かもしれない
心の中でそう思う
おはようは
あさごはんがおいしくなるかもしれない
いつてきますは・・・調味料じゃないけれど
一日の始まりのあいさつだから
元気になるかもしれない
さようならは 分かんない
でもでも ただいまは
おやつがおいしくなるかもしれない
かもしれないよ
私は そう思うけどね

(評) 日常の、ふとしたあいさつこそ大切なのだ、この作品から教えられるきっかけになりました。素直な詩の世界は「テーマ(題)」そのものが、まず読み手に語りかけてくることで、たくさんの言葉とともに広がっていくですね。

(彦根文芸協会 やまかみ まさよ)

佳作

一ぴきのくも

城北小学校5年

杉本 ちひろ

くもが一ぴき
巣をはっている
一ぴきで
こ独に巣をはっている
くもが一ぴき
糸に虫がかかるのを待っている
一ぴきで
しずかに虫を待っている
一ぴきでも
自分が生きるためにがんばっている

佳作

とりのばしょ

金城小学校6年

一井 颯駿

ぼくらは うえから なんでもみえる
ぼくらは とべば なんでもみえる
ぼくらは たべて いきていける
ぼくらは そらで いきていける
ひとは ぼくらのすを ゆるしてくれる
ひとは ぼくらにがいを あたえない
でも ひとは ぼくらを けいかいする
ぼくらは ひとを けいかいする
だから ぼくらは ひとを みている
ぼくら とりの ばしょ まもるため

佳作

ぼく

金城小学校6年

上田 てる葉

ぼくがはじめてすった空気

ふんわりおかあさんのおいがただよった
空気だった

ぼくがはじめてきいた音

かすかにきこえたふしぎな音

そしてぼくはおおきくなった

あんなにちいちゃかったのがうそみたいに

そしてあたらしいひびがはじまった

小さな時とはちがう

お母さんに宿題しろといわれるし

お父さんにははやくねろといわれるし

毎回毎回耳にたこが出来そうなくらい

いろいろなことをいわれる

だけどちよつとたのしい

でもすこしなにかがものたりない

でもこれだけでしあわせで

まわりにはうらやましがられるぐらいに



入選

焼きいも

金城小学校6年

辻川 美空

私は焼きいも

ホクホクおいしいよ

今年の秋もみんなに愛され

みんなの心をポカポカさせる

私は焼きいも

ホクホクおいしいよ

今年の秋もみんなに食べられ

みんなの体をあたためる

私は焼きいも

みんなに食べられ

今年も体をあつためるのさ

入選

人って不思議

城北小学校5年

武田 結良

人って不思議 人って不思議
 考えだしたら 止まらない
 色んな疑問が あふれでて
 もっと もっと 知りたくなる

人って不思議 人って不思議
 一人ひとり ちがうのね
 顔や性格も ちがってて
 まったく 同じ 人はいない

人って不思議 人って不思議
 言葉 一つで 変わるのよ
 けんか しても 仲なおり
 そんな 友だち ふやそうよ

人って不思議 人って不思議
 人生 たったの 一度きり
 だから 一しゅん 一しゅん 大切に
 後かい しないように 生きて行こう

入選

コロナウイルス

城西小学校6年

安藤 菜佑

今では手洗いうがいがあたりまえ
 今ではマスクをつけるのあたりまえ
 今では消毒するのがあたりまえ
 今ではソーシャルディスタンスあたりまえ
 三つの密をさけながら過ごすのはつらいけど
 一人一人の行動で

一人は助けられるかもしれないよ
 死にたくなくても死んじゃうよ
 みんなはそれでいいのかな
 いつかはいいことたくさんある
 それまでがまん
 みんなでがんばり乗りこえよう

入選

ギターと私

城南小学校5年

藤田 夏漣

ジャーン ジャジャン
 タラーン ジャジャ ジャーン
 曲に合わせて 弾けば
 私の心は 弾む
 気分は 上を向く

ジャーン ジャジャン
 タラーン ジャジャ ジャーン
 辛い時
 しんどい時
 不安な時

私のしずんだ心を いやす
 私の大切な黒いギター

ジャーン ジャジャン
 タラーン ジャジャ ジャーン
 ギターを弾いている時間はとてもHAPPY
 ギターは私にとつて かけがえのないもの
 ギターで いつか
 シンガーソングライターになりたい

【中学生】

特選

眠れない夜

南中学校3年

荒川 陽彩

カチ、カチ、カチ 時計が私をせかしてくる
 静まりかえった夜 かすかに聞こえる息つかい
 カチ、カチ、カチ 時間はどんどん過ぎていく
 だめ おいてゆかないで
 お願ひ おいてゆかないで
 カチ、カチ、カチ 明日が来る 明日が来る

窓の外を見る 一人ぼっちではなかった
 ラララ、ラララ 月が私をなだめてる
 それでもいい それがいいと
 わたしは静かに目をつむった
 サーサーサー 車の走る音
 その後の静寂
 もう 誰もいないぞとまた孤独がやってくる
 私は言いきかせる 一人じゃない 一人じゃないと
 もう怖くはない そして私は静寂となった

(評) 日付が変わる時間になっても眠れない夜の様子を
 繊細に描いています。何度も孤独におちいりそうに
 なりながら「そして私は静寂となった」の印象的な
 終わり方まで、特に最後の一行が作品を良いものに
 しています。

(彦根文芸協会 尾崎 与里子)



特選

クワガタ

東中学校2年

森田 佳祐

きょう クワガタが死んだ クワガタによって
 殺された クワガタは生きるために殺した
 クワガタはクワガタを生かすために死んだ
 クワガタはうごかない クワガタは死んだか
 ら動かない クワガタは殺されたから動かな
 い クワガタはクワガタを生かしたから動か
 ない

クワガタはうめられた クワガタは死んだか
 ら埋められた クワガタは殺されたから埋め
 られた クワガタはクワガタを生かしたから
 埋められた

クワガタはいきている クワガタは殺したか
 ら生きている クワガタはクワガタが死んだ
 から生きている クワガタはクワガタによっ
 て生かされたから生きている

(評) 十八行の短い詩の中に、クワガタという言葉が
 二十一回も出てきて驚いてしまいますが、二つの命
 の関係が哲学的な物語になっていて、思わず考えさ
 せられてしまう大人っぽい感覚は貴重なものだと思
 いました。

(彦根文芸協会 尾崎 与里子)

準特選

冬を呼ぶ何か

東中学校1年

北村 智也

何かが冬を呼んでいる
一枚一枚落ちながら

「おーい、おーい」

と呼んでいる

何かが冬を呼んでいる

ちらちらと落ちながら

「早く、早く」

と呼んでいる

その何かが落ち切ったとき

何かを冬がつつみこみ

何かはそのまま消えていく

「なようなら」

(評) 落ち葉を「冬を呼ぶ何か」というミステリアスな表現で、読者を誘い込むように描いていき、「何かを冬がつつみこみ」からの最後の3行が作品に美しい幻想的な奥行きを与えています。

(彦根文芸協会)

尾崎 与里子

準特選

かえりみち

中央中学校1年

田中 風香

今日のかえりみち

自転車に乗り ペダルをふみこむときに

顔をなでるつめたい風

飲食店の前を通ったとき食欲をそそる

おいしそうな香り

私のかげを映しだす真つ赤な太陽

住宅地をとおる時に聞こえる

子どものはしゃいでいる声やテレビの音

アスファルトの上で丸くなっているねこ

ああテストの点数なんて忘れてしまえそう

(評) 自転車で帰る途中の、活き活きと素直な感覚がとてもよく伝わってきます。そして最後の「テストの点数なんてわすれてしまえそう」で、この世界の様々なものに癒され救われている作者の瑞々しい心にこちらも嬉しくなりました。

(彦根文芸協会)

尾崎 与里子

準特選

合奏は家族のような

東中学校2年

山田 瑚雪

合奏は家族みたいだ

チューバなどの低い音は

どっしり支える父親のようだ

ホルンなどの温かい音は

やさしく包む母親のようだ

サククスなどのにぎやかだけど

落ち着いた音は

しっかりした姉や兄のようだ

クラリネットなどの高い音は

元気な妹や弟のようだ

パーカッションの合奏に欠かせない音は

その家族を守る家のようだ

合奏は幸せな家族みたいだ

(評) 登場する楽器の選択が本当にそれぞれにぴったりで、思わず「なるほど」と感心してしまいました。短い詩ですが、ゆったりとしたリズム感と音楽を愛している幸福感が伝わってきます。

(彦根文芸協会)

尾崎 与里子

佳作

詩

東中学校2年

若林 優名

私は詩を

書くのが苦手だ

だから良い詩は書けない

わたしは詩を

考えるのが苦手だ

だから頭を働かせたくない

わたしは詩を

読むことは好きだ

だから詩とふれあいたい

わたしは詩を

すばらしいと思う

その景色を想像できる

すばらしい作品

読者が想像をふくらませられる

すばらしい作品だ

佳作

冬の空

中央中学校1年

安井 柚奈

「はあ 寒い」

私の声があたりに響きわたる

今にもこおりそうな冷たい手

道を歩きたびにつく足跡

どんよりとした曇り空

家に帰ろう

そう思った時

ピカッ

「わあ きれい」

さつきまで曇っていた空が明るく

あたりの雪を照らしていく

太陽の光で照らされている雪は

まるで 夜空に光る無数の星のようだ

「なんて良い日だろう」

私は道に座り 私と雪を照らす太陽と

かがやく雪をじっと見つめていた

佳作

明日

東中学校2年

上野 波人

当たり前になっている

いつもの様にまっている

明日はみんなをまっている

木の葉

ちようちよ ラベンダー

明日はみんなをまっている

明日はつぼみが開花する

明日には生きる希望がある

明日は命が誕生する

明日はみんなをまっている

道をつくってまっている

みんなを照らしている

佳作

何げない日常

東中学校2年

畑野 蒼衣

友達としゃべりながら学校に行つて
友達と休み時間にいろんな話をして
班で机を合わせて給食を食べて
放課後には部活があつて
休みの日には友達と遊びに行つて
全てがあたり前たと思つていた
何ともおもつていなかった日々
失つてみてはじめて気づいた
あの日常が奇跡だったということ
この先何がおこるか分からない
私に今できること
それは
今一瞬一瞬を大切に生きること

入選

いきたい理想

東中学校2年

村元 優花

私は生きたい
虫めがねのように大切にみつめたい
カサのように人をささえたい
ガラスびんのような純粋な心と
ストローのようなまっすぐな心を
大切に生きていきたい
私は行きたい
過去でも未来でもなく
笑いあえる今このときを
私はいきていく

入選

雪

東中学校2年

七里 郁哉

白い雪
白い手袋
空から白い手紙が来た
たまった手紙が
冬を伝えている
白い息
白いくつ
空から白い手紙が来た
たまった手紙が
日を反射して
冬の日の朝を伝えている
ピンクにしげった木
ピンクのランドセル
空からこなくなった手紙が
もう冬ではないと伝えている

入選

支え合う花

中央中学校1年

三輪 明璃

通学路に

ドクダミの花が咲いている

黄色いドレスを着ていて

白い羽のはえた

小さな妖精みたいだ

緑の葉のクッションに

寄りそい支え合いながら座っている

花も

支え合いながら生きているんだなあ

入選

コロナ禍での日常

東中学校2年

北川 詩歩

コロナ禍の学校生活

いつもなら みんなで仲良く話すのに

マスクで声が聞こえずらい

もっと近くで話したい

コロナ禍の家での会話

いつもなら 旅行に行こうと切り出す

ニュースで各地の感染者数

早く遠くに出かけたい

コロナ禍のテレビの中

いつもなら 共演者同士が近いのに

社会的距離が保たれる

どこか少しさみしいな

コロナ禍のみんなの気持ち

いつもなら みんなでワイワイ楽しいのに

話せず 笑えず 楽しくない

全部 全部コロナのせい 早くいなくなれ

入選

学校への問い

中央中学校1年

佐々木 花音

学校 なあ学校

お前はなんで立つばに建っている

そもそもお前は何のためにある

勉強のためか それなら問題ない

しっかり授業中 話を聞いている

内容も大体分かっている

なのになんでテストをする

なぜ成績をつける

なぜ 9年間はぜったいに行かないと行けない

ああそうか 自分がどれ程がんばっているか

どれだけ内容が入っているのか

9年間で確かめているのだな

あと一つ問う お前があるせいで

どれほどの生命をうばっている

どれほどの感情をあげた

お前はなんでそんな立つばに立っている

【総評】

(小学生の部)

市内各小学校から多数の作品を寄せていただき、うれしい悲鳴をあげながら楽しく読ませていただきました。作品の傾向は二つに大別されると思われました。

一つは自分で見つけた書きたいことが自分の見方や感じ方で、未熟ではあっても生き生きとした素直な自分の言葉で綴られた作品。もう一方は与えられた題材や形式に合わせようと、ことがらを探し、言葉探しに苦心している作品でした。どの子も内なる力を持っています。一人一人が自分の表わしたいこと・伝えたい言葉を見つけてくれることが大切です。

(中学生の部)

誰もが大きく成長する中学の三年間、ひとつひとつの作品から「仲間」「勉強」「学校」「家族」「自然」「人生」様々な思いやメッセージがまっすぐに伝わってきて素晴らしいと思えました。詩は個人の感性を何より大切にしたいので、上手く書いていても説明的なものや情報をそのままというものはちょっと敬遠しましたが、今年はコロナという特別な状況の中で、例年になく大勢の中学生が素敵なお詩を書いてくれたことを何より感謝したいと思います。

(彦根文芸協会 谷口 明美)

(彦根文芸協会 尾崎 与理子)

審査いただいた皆様

(敬称略・順不同)

彦根文芸協会

俳句

勝又 千恵子
松本 トシ子
野瀬 章子

川柳

重森 恒雄
浅井 利行
浅野 忍
森口 ゆめみ

短歌

河分 武士
長谷川 紀子
森 典子

詩

谷口 明美
尾崎 与里子
やまかみまさよ
西村 和野

彦根市教育委員会事務局
文化振興室

〒522-0001 滋賀県彦根市尾末町 1-38

彦根市民会館 1 階

TEL 0749-23-7810 FAX 0749-21-3080

<http://www.city.hikone.shiga.jp/>